

「八田知紀の白雲日記」補遺

—— 羽鳥春隆の「彩園遺稿」 ——

藤 田 福 夫

筆者は昭和六十一年三月刊の本誌第十号に「八田知紀の『白雲日記』について」の解説欄刻を掲載していただいた。然るに同日記の跋文の筆者羽鳥春隆については、ただ尾張住で知紀の弟子であったとのみ記した。ところがその後、梶山女学園大学図書館蔵の山崎文庫の目録により「彩園遺稿、羽鳥春隆翁歌集」（明治三十一年刊かと思われるが、刊記を欠く。）が所蔵されていることを知った。同書を閲覧したが、その序、跋により春隆は知紀門で「白雲日記」の刊行者であることを確認し得た。ここでは「彩園遺稿」の跋文（小貝諸文筆。諸文は春隆の後輩で知紀門であった。「名古屋文学史」（川島丈内）により、春隆の略歴を知り得たので紹介することにした。跋文全文はやや長文なので抄記して紹介する。（跋文は文語文）

春隆はじめ名古屋南郊、津島の津島神社の神官であった。若い時から歌に志深く、大阪の熊谷直好に入門、また大和絵を浮田一恵に学んだが、性剛気で津島神社の長官神職と争い、津島を去り、遠江、京都、浪華に長く漂浪した。熊谷直好死後知紀を師とし、直接教えを受けたが、元治元年熱田の政林寺の宜藤禅師の許に仮住居し、絵を業として歌も教えたという。諸文は近くに住まっていたので交わりを深くしたというが、春隆は明治十七年一月六十八歳で死

去した。残された詠章は熊谷、八田両翁の添削を受けたものがあり、また反古様のものもあったという。それらの中から、貝谷政直、青木隆とかが作品を抄出したものが「彩園遺稿」であるという。

同書は美濃判三十九丁、序（夢適舎
利和）一丁半、跋二丁と二行。本文は、新年、春の歌五十九首、夏の歌六十一首、秋

の歌七十六首、冬の歌四十首、恋の歌二十六首、雑の歌九十六首から成っている。雑の歌その他に知紀の「白雲日記」の中の上京とか、また知紀の十年祭に言及しているものがある。また春隆と交わりのあった人物には佐佐木弘綱、村山松根、須川信行、尾崎穴夫など知名人の名が見える。知紀関係の作と一、二の作とを抄出しておく。

○八田大人の十年祭に虫告秋といふことを

このかみのかなしかりつる秋きぬと鳴てもむしのしらせたるかな

○八田大人七十の祝にふしのね見たまはむとて東にいてたちたまふむまのはなむけに

（この歌、同表現で「白雲日記」に見える。）

よの中にふたつなきもの立ならふ時とやふしも君をまつらむ

○御東幸あらせられける時わか熱田の駅に行在所定めたまひにければ

大君もおほみたからもやとります一夜はこ、もみやこなりけり（以上、雑の部）

○元治元年京都にて大火の後の望の二夜に月の見えければ

世の人のなみたにくもる秋なれば晴てもつきはかひなかるらむ

○この夜（久しぶりで津島へ行った日の夜）孫繁太郎をつれて大宮にまうつ

老ぬれはわれをわすれて大神もたひの人とやみそなはすらむ

つかへたるむかしこひしみぬかつきは神の心はいかかとそおもふ

ひろまへはくさ葉も露もなきものを何にぬれたるたもとなるらむ
(以上、秋の部)

この津島での作などは旧派の歌ながら実感を出したものである。

なお前引「名古屋文学史」(川島丈内)の第五編第六章の「桂園派の流行」の叙述は「彩園遺稿」を参考にしたところがあると思われる。なおまた「白雲日記」についての拙稿中一部羽鳥か羽島となっていた。羽鳥が正しいものである。